

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no.107 Mar.

都留文科大学 地域交流研究センター 機関誌
『フィールド・ノート』 no. 107 Mar. 2021

木とともにある記憶

桂をめぐる旅

松柏の志

前編 まっすぐに変わらない心

木の変遷をたどる

暮らしを変える、

生きかたが変わる

落ち葉の時間

使って、飾って、観察する

とちまnbくんの記憶



うら山で見つけたホオノキの根。いったい何年生きているのだろう (2021 年 3 月 1 日)

FIELD・NOTE

no.107 Mar.

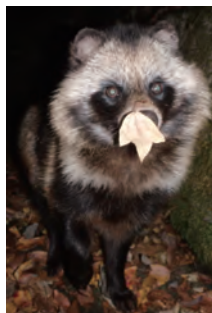
特集

木とともにある記憶

- | | | | |
|----|------------------------|----|-----------------|
| 08 | 桂をめぐる旅 | 52 | 都留の風景写真集 |
| 10 | 松柏の志
前編 まっすぐに変わらない心 | 50 | 鍛冶屋坂を訪ねる |
| 14 | 木の変遷をたどる | 48 | 冬を越す |
| 17 | 暮らしを変える、
生きかたが変わる | 36 | つるを味わう |
| 21 | 落ち葉の時間 | 34 | 柄の絵 |
| 24 | 使って、飾って、観察する | 32 | 絵がつなぐもの |
| 26 | とちまんぶくの記憶 | 30 | 「おなん」をしていますか |
| | | 28 | 都留からみえる富士山 |
| | | 46 | センサーカメラが写した動物たち |
| | | 40 | 都留が恋しくて |
| | | 38 | こだわりの宿るパン |
| | | 37 | ムササビ観察日記 |
| | | 47 | フィールド暦 |

表紙写真

キャンパスの側溝で撮影されたタヌキです。鼻に落ち葉が付いているようですが、マスクをしているように見えました。本誌46頁のタヌキも同じ場所で記録されたものです。(2020年11月中旬)



FIELD・MAP

木とともにある記憶



1

桂をめぐる旅

402-0053 都留市上谷 1888-1



2

松柏の志

402-0051 都留市下谷 2954



3

木の変遷をたどる

402-0053 都留市上谷 6 丁目 4-27



5

落ち葉の時間

都留市上谷周辺



6

使って、飾って、観察する

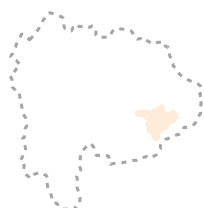
402-0053 都留市上谷 2140



7

とちまんぶくの記憶

都留市与縄日向集落



山梨県都留市
面積 161.63km²
人口 29,858 人 (令和 3 年 2 月現在)



0 1 km 2 km 3 km



暮らしが変わる、
生きかたが変わる
402-0054 都留市田原 1 丁目 8-4

木とともにある記憶

「危ないから」と注意されると

余計に高いところまでのぼりたくなつて

落ちないように小さな足で足場を探す。

そうかと思えば地面に落ちた枝を刀がわりに

友だちと戦ってみることもあった。

ときには細い枝についた実が

いつ落ちてくるのだろうかと楽しみにしながら

自分の背丈よりも何倍も大きい木を見上げた。



私たちの木とともにある記憶は

小さいころの自然との触れ合いから思い起こされました。

木は昔から私たちの身近にあるため

日常のなかで思い出深いものになりやすいのかもしれませんが。

都留にある木にも、私たちの木との思い出のように

過去の記憶が宿っているかもしれない。

今号の特集では都留に根付く木と

そこにある記憶をさかのぼります。





桂をめぐる旅

都留には山中湖を源流とした「桂川」^{かつらがわ}という川が流れている。桂川は人びとの生活用水となり、「東桂」^{ひがしかつら}という地名としてもきざまれている。都留と大きな関わりのある桂をさがしに、私は小さな旅に出た。

高木帆月（比較文化学科）＝文・写真

気になる木

都留市は木に囲まれたまちだ。山に入ればスギの木やホオの木があり、本学のキャンパス内にもイチヨウの木やトチノキなどが植えられている。

「都留で気になる木ってありますか」。その言葉に、青木先生は「桂の木ですね」と答えた。青木先生とは本学で図画工作の教員をつとめていらつしやるかただ。本学につとめる前までは刳物^{くろもの}とよばれる木材をくりだして容器などの製品をつくる講師をなさっていたそう。青木先生は木材に関してとても多くのことを私に教えてくださった。桂の木を挙げた理由を青木先生に聞いてみると、「都留には桂川^{かつらがわ}って名前の川があるくらいだから、桂の群生地なのかなあって」と首をかしげたあとで「でも無いんだよね、桂の木」と大きく笑った。あとから調べたところ「桂川」は石割山の山頂付近にある桂の御神木が名前の由来になっているようだった。

「桂っていうのは僕らからしたら憧れの木材なんですよ」。青木先生はそう続ける。「僕ら」とは「つくり手」のことなのだろう。桂

の木は加工しやすく、質感は絹のような上品な肌ざわりなのだという。「最近では貴重になつてしまひなかなかけない」と聞き、「憧れの木材」という言葉を思いながらうなずいた。

桂の木をさがしに

近くにある桂の木の間所をたずねたところ、うぐいすホールの近くとスーパーマーケットに行く手前の道に生えていると教えてくださった。うぐいすホールへと向かい、見つけた桂の木にふれてみる。あたたかいと感じるから不思議だった。

同行してくれていたかたが「これが桂の木の葉っぱですよ」と落葉を手渡してくれた。「嗅いでみてください」。そう言われ鼻元に葉をあてると甘い匂いが香った。わたがしみたいな匂い、カルメ焼きみたいな匂い。匂いから連想するものがその場にいた人それぞれで違う。私は「みたらし団子に似た匂いだなあ」と感じたけれどなんだか恥ずかしくて言い出せなかった。

もう一本の木があるというスーパーマーケットに向かっている途中で「あつ」と声を

あげた。「伐られてる」。指さす方向には切り株だけがぼつんと残されていた。切り株の前でしゃがみこみ、年輪を指でなぞる。冷たさが指に伝わって「ああ、この木はもう生きていないんだなあ」とようやく実感した。

新たな命

美術棟の扉をあけると胸いっぱい木の間所が広がった。森のなかで感じる木の匂いはまた違う。一つひとつの木材が意思をもつたように、匂いというかたちで出迎えてくれる。後日、桂の木の材木や作品を見せてくださるのとこのことで、私は再び青木先生のもとへと向かった。机の上に置かれた桂の材木は私の両手を広げた大きさとほぼ同じくらいで、持ち上げるとずしりと重い。「だいたい2キログラムしかないよ」と言われたが、私がいつも買っている2キログラムの米袋よりもずつと重いような気がした。

「これ、桂だよ」。青木先生が制作途中の器を手渡してくれる。ボウルのようなかたちをした底の深い器になるのだろう。内面の不規則な凹凸が「人の手で作られた」ということを教えてくれる。器を両手で包み込むと、じ

んわりとしたあたたかさが広がる。それは木の幹をふれたときに感じたあたたかさによく似ていた。

「人間の言い訳かもしれないけれど、また新たな命が生まれるんだよね」。その言葉で、伐られてしまった桂の木をふいに思い出した。あの場所では根を伸ばしていた木も、かたちをかえて日常というあらたな土壌に根を張っているのだろうか。

桂をめぐる旅を終えた。けれど、あの桂の木は森から日常へ、そしてまた新たな場所へとこれからも旅を続けていくのだろう。



桂の材木でつくられた割物。木づちと鑿をつかい、器のかたちを削りだしていく（2020年12月17日）

松柏の志

前編 まっすぐに変わらない心

都留市下谷の羽根子にある長生寺の中雀門。その前には二本の杉がそびえ立っている。どつしりと構えている木々のすがたを見ていると、長い年月にわたって都留市を見守ってきたことが伝わってくるようだ。私は、そんな木々が持つ力強さに心惹かれ、どのような歴史をたどってきたのかに興味を持った。



木と同じ視点に立ってみようと試みたところ、すがすがしい空のしたに都留の街並みが広がっていた(2021年1月22日)



二本の木との出会い

昨年(2020)の2月、私は友人と散歩をすることになった。空気が澄んだ晴れの日で、散歩にはぴったりだった。春休みで時間がたっぷりあるから、どこか未踏の地を目指してみよう。私たちはかよい慣れた大学への道とは反対側へ向かって歩き始めた。

足に任せて進んでいくと、金井トンネルの右手に登っていく道があった。何かおもしろいものがあるのではないか。私の心は好奇心でいっぱいになった。友人も同じ心境なのか足並みをそろえて歩いていく。するとその先には「曹洞宗、長生禅寺」と彫られた石柱があり、寺社仏閣が大好きな私たちは興味をもった。

少し苔むした幹が長い年月を感じさせる (2021年1月22日)

寺までつづく急な坂を見上げると、青い空の真ん中に二本の木が並んで立っており、その奥にある古びた門が目についた。門に近づくにつれて木々がいかに大きいかを認識し、どんどん圧倒されていく。右側の木の真下から見上げてみると、幾重にも重なって伸びた枝葉が覆いつくしたような感覚に陥った。そのままぼうっとしていると、首が痛くなってしまった。「いたたた……」と首をさすりながら友人のほうに目をやると、彼女は太い幹に抱きついていて。抱きついていてというより寄りかかっているように見え、木がどれくらい大きいのかということを改めて実感した。これまで見た木のなかでも群を抜いて存在感と迫力をもつ二本の木。時間が経ったあとでも、その木を見つけたというできごとは、木の大きさに比例して心のなかに強く残りつづけた。

二本の木の過去

二本の木のことが忘れられなかった私は、昨年の12月11日にふたたび長生寺を訪れた。住職の山本義典さん(79)は、飼猫とたわむれつつ、たくさんのお話を話してください

た。まずは長生寺の歴史について教えていただいた。長生寺は500年以上前につくられた由緒あるお寺で、坐禪に徹する曹洞宗の教えを信仰している。17世紀初頭には火事で寺の建物が焼け落ちてしまったが、再建が行われると同時に中雀門も創建された。しかし再度火事にあつたため、現在は中雀門のみが近世当時の状態を保っている。

「そういうえば門の前の木について知りたいんですよ」と山本さんがおっしゃって、二本の木に話題がうつる。「あれは杉の木で、木（の歴史）がどのくらいかな、ということなんですけども、私どもが聞いているのは300年以上かなあと…」と、私が気になっていたのを察したのか、はじめに樹齢について教えてくださった。300年前の日本は江戸時代だと気づいて、すんなりと想像することのできない時代の流れに私は一瞬思考を止めてしまう。山本さんは続けて、「昔はずっと杉並木があつたらしいんですよ、下までね。根っこは少し残っているんですけど、第二次世界大戦のときに供出きょうしゅつといって（木を含む）色んなものを出したんですよ。それで木を切つて軍艦をつくつたついでにうんだけど…」

と語つた。戦争の影響が木々にもおよんでいたという予想外の歴史に衝撃を受ける。さいわい、長生寺が歴史あるお寺だということで大梵鐘だいぼんしゆのような金属類の徴収は免れたというが、それでも戦争のために立派な杉並木が失われたのだと考えると胸が痛む。同時に、お話をうかがつてみないと分からない物語があるのだということを実感した。

木を残すという選択

「木を植えたり育てたり管理したりついでうことは相当人手がかかるんだけど、第二次世界大戦のようなときでも、切る人が二本だけ残したということがね、どういう人がそういうことをしてくれたのかは分からないんだけど、そこに思いを馳せるとね、木というのも色んな流れのなかで残っているのかな、というふうに思うんですよ」としみじみ語る山本さん。そのすがたが目には焼き付いている。木を切つたのはもちろん、戦争に勝つことが最大の目的とされていた時代に生き残った人びとだろう。そのような状況のなかであえて残すという選択をしたのは、きつと木への思い入れがあつたからなのではないか。今



杉の木と同様に中雀門も見上げてみた(2021年1月22日)



山本さんと眩しそうにしている飼い猫(2020年12月4日)



木と並んで仁王立ちしたが、木の力強さには敵わない(2021年1月22日)

となつては正解を確かめることはできない。しかし、帰るまえにもう一度杉の木を見上げながら「幼少期に木とふれあつてきたのかなあ。木に囲まれて育つたのかなあ。木を育てることの苦勞を知つていたのかなあ」と、木を伐採しなければならなかつた彼らの根底にある思いを想像してみた。

「心の杉」という言葉を知っているだろうか。これは、杉の木が一直線に伸びるようす

から「まっすぐな心」をたとえたものである。また、杉の木が常緑樹であることから「変わらない心」をたとえることもある。長生寺へ行つたあと、私が杉について調べたさいに学んだ言葉だが、長生寺の杉の木はまさに「心の杉」のあらわす「まっすぐで変わらない心」という意味を体現しているようだ。3000年前から根を張り、まっすぐにその身を伸ばしてきた杉の木。戦争というできごとのなかで

伐採の危機にひんしたものの、今も変わらぬ姿で残っている。そして自然の温かみをもつて、刻まれた過去を私に教えてくれた。この過去こそ、お話をうかがわなければ知ることのできなかつた、木とともにある記憶なのだろう。「私も木を残してくれた人びとや木のそばで生活してきた山本さんのように、内包された過去の物語を未来につなぐためのお手伝いがしたい」。その一心で、目の前のパソコンに向き合つて文章をつづつてみる。

* * *

思いがけないようなドラマとともに木が存在し続けているのは、これまでに木と関わつてきた人びとが残していこうとする意志を尊重してきたからだろう。私は長生寺の杉の木とともにある記憶をたどることで、まずは木との関わりをもつ人びとの一員となれた。

しかし、木を大切にする気持ちの根本にどのような思いがあるのかは、あいまいなままである。この疑問の答えは後編で探っていきたい。

辻口いづみ(地域社会学科2年) 文・写真
竹内彩笑さん 撮影協力

木の変遷を たどる

「何も咲かない寒い日は、下へ下へと根を伸ばせ」その言葉のとおり西願寺^{さいがんじ}の境内にある枝垂れ桜の木は、寒さで固くなった土に臆することなく力強く根を張っている。お寺の門をくぐり木の下に立つと、垂れ下がった数百本の枝が体に巻きついてそのまま大木に吸い込まれてしまいそうで、なんとも不気味だ。お寺を訪れお話を聞くと、枝垂れ桜の木のほかに長い時間を生きてきた木があることを知った。



生きる木

12月10日の夕方、冬の澄んだ空気に、遠くからでも枝垂れ桜の枝が鮮明に見えた。木に近づく、枝は私の体だけでなく周りの木や建物までも飲み込んでしまいそうな勢いで伸びている。木をぐんと見上げてみる。人の腕くらいのものからつまようじほどのものまで、いろんな太さの枝が私の視界を埋め、それが人の体を巡る血管のように見えた。足元を見ると数本に分かれた太い根元は、地表にまで顔を出している。数メートル先にある隣の木は根元にまで根を伸ばす姿から、私には広く感じた境内が木にとっては窮屈そうに思えた。根の周りの土は盛り上がり、今にでも動き出しそうだ。

小さな苗木の成長

数日後、西願寺の住職さんの奥さまにあたる大江啓子（73）さんに木についてお話を聞いた。境内に枝垂れ桜を植えたのは、知り合いかから苗木をいただいたことがきっかけだという。「40年前、植樹するときは両手に収まるくらいの大きさの苗木だったのに、あれよ

あれよとこんなに大きくなっちゃった」と予想外の成長ぶりに、少し困った表情を見せながら言った。

桜は40年から50年が寿命だというがこの木は植えられてからすでに80年ほどたっている。私は、桜の木の命の短さと、100年以上は経過しているように思えた枝垂れ桜の木が案外若いことに驚いた。「昔はうら山の桜並木を見にきた子供たちがお寺の廊下でお弁当を食べたと聞きました。この枝垂れ桜はあまり有名ではなかったんですね。でも今では県外の人たちがきてカメラマンでいっぱいになります」と口にする啓子さんはどこか嬉しそうだった。「でも最近になって花のつきがあまりよくなって、花の色も昔に比べて薄くなりました」と寂しそうに木のほうに目をやる。花のつきが悪くなっても枝の伸びは止まらなかった。10年ほど前にはついに枝が地面につくほど垂れ下り、それを見かねた植木屋さんがちょうどいいあんばいに切ったという。また以前の本堂を壊したさいに土のなかから木の根っこが顔を出したという。枝垂れ桜の木の根元から本堂までを歩数で計算してみると、16メートルほどはありそうだ。木がどつ

しりと身構え何にも動じないようすに、上に伸びる幹や枝よりも根っこのほうが長いかもしれないと考えさせられた。

お寺のシンボル

啓子さんは続いて、枝垂れ桜の枝に覆いかぶせられた隣の木についても話をしてくれた。「枝垂れ桜よりもね、この紅葉の木のほうがずっと古くて、植えられたのはたしか400年くらい前だと聞いています」接ぎ木（※）をしたせいか、地面から30センチほど



現在の本堂を建てたさい、枝垂れ桜の根は切られた(2020年12月1日)



門よりも背が高いイチヨウの木 (2006 年 9 月 2 日)



切り倒された右側の木のほうが若干細く見える (2006 年 9 月 2 日)

離れた場所から木の幹が一回り太くなっていた。西願寺は昔、都留市四日市場よっかいちばにあった。しかし、菅野川の洪水のため、現在の都留市上谷かみやに移動したそう。「四日市場から今の位置にお寺を移したのがちょうど400年くらい前だから、お寺の移動と同時に紅葉の木は植えられたのかもしれないです」と啓子さんは何世紀も前のようすを思い描く。昔は同じ木がもう一本あったが病気になる伐採した。二本は、太子堂と呼ばれる聖徳太子が祭られている建物の正面を挟むように立っていたようだ。「どつちかといえば私たちの中でこっちの紅葉の木のほうがお寺のシンボルだと思っているんですけどね」と枝垂れ桜を横目に見ながら優しく微笑んだ。大先輩の木を前に悠然と枝を伸ばす枝垂れ桜に、遠慮などという言葉は似合わない。紅葉は赤い芽を出し、そのあと黄金色、黄、若草色、緑、赤、茶に葉の色を変えることから七変化と呼ばれ、これは紅葉の木のなかでも珍しい種類だそう。「枝垂れ桜の木が花を咲かせるころには紅葉の木に赤い芽が出てきて、ピンクと赤のコントラストが見事です」と啓子さんは次の春を見据える。

紅葉の木のほかにも15年ほど前は、お寺の門の横にイチヨウの木があったそう。イチヨウの木は火に強いことから、お寺や神社を火事から守るためによく植えられると教えていただいた。

* * *

はじめは大きな枝垂れ桜の木に圧倒され、お寺にうかがった私であつたが、いつのまにか境内にあるほかの木の過去にまで話はさかのぼっていた。毎年、自由に枝を伸ばしそこに見事な花をつける枝垂れ桜の木。お寺のシンボルとして4世紀以上残されてきた木。神社を守るために生きた木。私は、はじめて木を通して年表のように時代の変遷をたどることができた。

枝垂れ桜の木は80年という歳月をかけて人々の目を引いてきた。1月の寒さのなか枝に小さなつぼみをつけ移り変わる季節の準備をしている枝垂れ桜の木は、今を生きる私たちに勇気をくれたようにも思えた。

風間悠花(地域社会学科3年) 文・写真

暮らしを変える、 生きかたが変わる

道沿いに薪がたくさん積んである。これらは薪ストーブに使うらしい。エアコンや電気ストーブが普及した今、薪ストーブは私の目にとっても新鮮に映った。どんな暮らしをしているのだろう。薪割りは大変ではないのかな。気になった私は都留市田原の薪ストーブ店「HAIDA」へ取材にうかがった。



大きな煙突とたくさんの薪

12月2日の凍えるような寒い夕方、私は取材にうかがった。お店は国道139号線から一本入った細い道に面していた。車通りの多い道から少し外れると、黒い煙突が伸びた、欧風の外観の建物が見えてくる。外には数メートルにわたって大量の薪が積んであった。入り口前の鉄のアーチには英語で文字が彫ってある。お洒落な雰囲気、まるで外国にきたような気分になって、わくわくしながら門をくぐった。

「どうぞどうぞ」。奥から聞こえる店主の渡邊達也さん(51)の声にうながされ店に入る。ところ狭しと並べられた数十台の薪ストーブはどれも物珍しくてじっと見つめてしまった。店のなかは、オレンジ色のライトの光と炎のぬくもりに包まれていて、思わず「あつたかーい」と声が漏れる。渡邊さんはそんな私に笑いかけながら「薪ストーブは部屋全体をあたためるからね、エアコンとかよりあたたかいんですよ」と教えてくれた。先ほどまで寒くて縮こまっていた身体がじんわりとほぐれていく。

自然とともにある暮らし

ストーブの前に置かれたソファに腰掛ける。火室(※)のなかでは赤い炎が揺れていて、見ているだけで心が安らいだ。

渡邊さんはよかつたら、と言ってストーブの上に置いたポットからあたたかい紅茶を出してくれた。ストーブは部屋だけでなくお湯や料理をあたためるのにも使えるようだ。私はふと小さいころ、ストーブの上でやかんのお湯を沸かしていた祖母のすがたを思い出した。「火室のなかではグラタンやお菓子も作れますよ」。薪ストーブはただ暖をとるだけではなく、暮らしのなかに溶け込んで、憩いの場をくれる。渡邊さんは、薪ストーブを囲んで一家団らんするのが好きな時間だと教えてくれた。薪ストーブの前で家族に料理を振る舞う自分を想像して頬がゆるむ。私は薪ストーブの魅力にどんどん惹きこまれていった。「でも薪を用意するのは大変じゃないですか」。最初に薪を見たときに思ったことを尋ねてみた。渡邊さんは都留市が地元だから、知り合いの土建屋さんや林業をやっているかたが木材を分けてくれるのだとおっしゃった。



世界各国をまわり厳選したストーブ(2021年2月22日)

た。その薪を自分で割って乾燥させているそう。外に積まれていた大量の薪を思い出す。割るのにいったいどれくらい時間がかかるのだろう。渡邊さんは「手間がかかるけど、生活自体が変わるから。生活が変わると考えかたが変わっていくからね」と嘯みしめるようにおっしゃった。手間がかかるということは、そのことに割く時間が増えるということだ。向き合う時間が増えれば考えかたも自然と変わっていくのかもしれない。



左：薪を入れて待っていてくださった 右上：木彫りの魚のトーテム 右下：ぎっしりと積まれた薪（2021年1月13日）

渡邊さんが薪ストーブ店をはじめたきっかけは、再生可能エネルギーを使う暮らしを提案したいと思ったことなのだそうです。そこから化石燃料のこと、自然との関わりかたなど、渡邊さんが目指す暮らしをいねいに話してくださいました。

「持続可能な社会のために、林業などであまった木材で暖をとる。もちろんふだん移動するのに車を使うとかはするんだけど、暖房とかは、地元の使えるものなるべく使いつつ、できるだけ化石燃料を削減していきたい。薪ストーブのそういうところがいいなあと思っています」。毎日少しでも意識することと環境が変わる。そのお手伝いができたら、と語る視線は、つねに未来を見ているように感じた。そう感じるのには、豊かな自然を残していきたいという渡邊さんの強い意思があるからなのだろう。

私は、ふだんの暮らしのなかで自分が自然とつながっているという意識をどれだけ持っているだろうか。コンビニでレジ袋を買ったり、車で移動したりするさい環境に思いを馳せることなんてほとんどなかったな、と気づかされた。渡邊さんの言葉を思い出す。日々

の小さな意識を変えれば暮らしかたも考えかたも変わるのだ。私も今日からは買い物にエコバックを持って行こう。そう思ってお店をあとにした。

カナダへの夢

渡邊さんが「HAIDA」を開いたのは2018年のこと。「はじめられたのは意外と最近なんですね」と言うと、薪ストーブ店をやる前は、レストランをやっていたと教えてくれた。薪ストーブ店とレストラン。まったく違う業種に思えておどろく。そういえば店前のアーチに「cafe」という文字が彫ってあったような。

私は、はじめは二つの仕事につながりを見だせなかったが、お話を聞いていくうちに、渡邊さんの経歴はすべて一つの夢に繋がっていることがわかった。

「カナダにユーコン川というすごい大きな川があつてね。僕は小さいころから釣りが大好きで。そのユーコン川で、日本人初の釣りのガイドとして、日本人のお客さんに釣りをさせてあげたいというのが僕の夢だったんですね」。

ユーコン川はカナダとアメリカにまたがる長さ約3700キロの川だ。「ユーコン」とは現地の先住民の言葉で「偉大なる」という意味で、その名のとおり雄大な自然に包まれ、カヌーや釣りなどが楽しめることで知られている。渡邊さんは、小さいころから地元都留市の桂川や国内外の多くの河川で釣りを楽しんできたという。そのなかで出会ったユーコン川に魅せられ、この夢を抱いたそうだ。

「ガイドになるためにはベースキャンプとなるログハウスを建てることと、来てくれたお客さんに料理を振る舞うこと、それからヘリコプターで現地まで送迎することが必要なんです。だから、ログハウスを建てることと料理を作るつてことを日本で覚えて、あとは現地に行つてヘリコプターの免許を取ればいいと思つて」。現在は薪ストーブの仕事しながらログハウスの建築についても学んでいるそうだ。カナダやヘリコプターなど、想像もしていなかった壮大な夢に胸がドキドキした。私は今まで、仕事というもののだけ突き詰めるというイメージがあつた。しかし、渡邊さんにとつて今やつていふことすべては未来のためのステップのようだ。

ハイダ族の暮らし

渡邊さんは、よく「ハイダさん」と間違われるんだよねと苦笑しながら店名の由来を教えてくださいました。「店の名前はカナダの民族であるハイダ族からとりました」。料理の修行が終わり、薪ストーブ店をはじめまでのあいだ、薪ストーブ文化が浸透している欧米各国をまわつた渡邊さん。実物を見て、本当によいものを探したそう。「カナダに研修に訪れたさい、トーテムポールがたくさん建つていてね。理由を聞いたらここは元はハイダ族のリトリートだつたんだつて教えてもらったんです。トーテムポールとは、北アメリカの先住民が自分たちのトーテム(※)を彫刻した木の柱のことだ。彼らは柱に熊や鳥などのすがたを刻み、家の表札のように使つていたという。トーテムポールから、自然とともに生きてきた先住民の文化を感じ取ることができる。店内にも、動物の形に掘られた木の置き物がたくさんあつた。

私はお話を聞いていて、渡邊さんの考えかたや暮らしかたに、ハイダ族の文化に通じるものがあると感じた。ハイダ族はユーコン川

の恵みのなかで生活をしてきた。渡邊さんにも、幼いころから森でムササビを見たり、川で魚を釣ったり、自然のなかで生きてきた記憶が根付いている。自然と身近な暮らしをしている人びとは、木や水を利用しながら共生してきた。そこには自然への敬意や、自然を大切に思う気持ちがあつたはずだ。今は、昔のように一から木材を準備したり、自分で薪割りをしたりしなくても十分に暮らしているようになった。けれど、私たちの暮らしのなかには、食べものや木製の家具など、多くの自然のものがある。人間の営みの原点にはやはり自然との関わりがあるように思うのだ。

* * *

薪ストーブから持続可能な社会を目指す渡邊さん。豊かな森を未来に残すためには、私たちがふだんから意識して自然を利用し、手入れすることが必要だ。私もこれからは、渡邊さんのように自然とのつながりを忘れずにいたい。「生活が変わると考えかたが変わつていくから」という言葉は、これからもずっと心に留めておきたいと思つた。

渡邊唯(地域社会学科2年) 文・写真

落ち葉の時間

たくさんの木々が紅葉をはじめる 11 月。青空に映える木の葉へ、カメラを向ける人のすがたをよく見かけられるようになった。その足元は落ち葉で赤や黄色に染めあげられている。「この落ち葉はどうやって腐葉土になるのだろう」。今回はゆっくりと流れる落ち葉の時間を見つめる。

腐葉土はどこ？

「腐葉土」と聞いて思い出すのは、小学生のときに校庭の落ち葉を集めて土と混ぜ合わせていたことだ。つまり落ち葉と土を混ぜると腐葉土ができるはずだが、自然界で落ち葉はどうやって混ざるのだろう。腐葉土がどこで、どのようにできるか考えたこともない。

そこで大学周辺で落ち葉がだんだんと細かくなっていくところを観察していた。けれど 12 月になり木がすっかり葉を落としきつたころ、溜まった落ち葉はきれいに片付けられてしまった。「やっぱり山に行くべきか」。そう考えていたとき、腐葉土の観察に良い場所があると編集部の方北垣先生に教えてもらった。その場所はうら山。行ったことのない私は先生に案内してもらい、見に行くことにした。

うら山にあった人の営み

12 月 14 日。先生に連れられ軽いハイキングのつもりではじめて向かったうら山は、思ったより起伏の激しい場所だった。野球場のうら。知っている人でないと気づかないかすかな道に登山道の看板がある。そこから山へ入



斜面上の木がケヤキ。左の並木は植樹されたもの(2021 年 2 月 8 日)

ると木々が茂って薄暗く、足元は落ち葉で埋め尽くされていた。入ってすぐのところ、先生から「地面が硬いでしょ」と言われ足踏みをしてみると確かに硬い。地面というより「大地」という感じがする。先生について行きながらあたりを見ると、歩く場所は木が生えてない。無計画に進んでいるように思えたそこにはうつすらと人に踏みしめられてできた道がある。さらに斜面を下っていく途中には、葉だけの彼岸花が数のように茂っていた。ずっと昔はこのあたり一面が畑で人や馬が行き来していたらしく、彼岸花はその証拠だそう。彼岸花の毒のおかげで虫や小動物から作物を守ることができ、またその根は分球^{ぶんきゅう}によって増える。分球とは球根が子孫である子球を作り、それが分かれてひとつ



穴が深くなるにつれて、落ち葉が細かく黒ずんでいくことがわかる
(2021年2月8日)

の新しい個体になる増えかたのことだ。そのため地面を歩きやすく固めることができ、里山によく植えられるらしい。

人と馬の道

彼岸花を通り過ぎて、大きなケヤキが生えた斜面をくだった先、木が何列も真つ直ぐに生えている場所についた。これは田畑だったところに植樹したものだそうだ。そのすぐ右側に、ケヤキの落ち葉に覆われた斜面がある。

奥へ続くその斜面のすぐ下の地面では、大きくでこぼことした道が続いている。その道の左にはまっすぐ平坦な道がある。左側は人が歩き、右側は馬が歩いていたらしい。左側は落ち葉が少なく、木も生えていないため人の歩いてきた道だとすぐにわかる。いつぼう右側の馬道は、重い荷物を持った馬が歩くことで地面が沈み込み、そこへ斜面から滑り落ちたケヤキの落ち葉が溜まる。おかげで落ち葉の層が厚くなり、踏み固められた左側の地面と違って足が沈みこむ。馬道の盛り上がっているところと、くぼんでいるところでどれくらい落ち葉の溜まり具合が違うか歩いてみた。盛り上がっているところは、山に入つてすぐの登山道と同じように硬く、くぼんでいるところは落ち葉で足がふかふかと埋まる。さらに盛り上がっている硬い地面は掘り返しても落ち葉の層が薄い。人が歩いてきた左側の道と変わらないうらいつかりとした硬い地面が落ち葉のすぐ下にある。けれどくぼんでいる方は深く掘ることができる。もしかしたら1メートルくらい掘れるかもしれない。落ち葉の溜まっているところを掘り返してみた。すると落ち葉はしだいに黒や茶色に染

まっていき、形の残っているものやバラバラになってしまったものが入り混じっていた。そこからさらに掘ると、落ち葉はさらに細かく、粒子に近くなる。そしてさらに掘り返すと黒い土がのぞく。その黒い土を手のひらに乗せてみると軽くふんわりとしている。嗅いでみると少し甘くて、森や大地を思い起こさせるような匂いがした。これが腐葉土なのか。腐葉土と出会うまでに掘り返したのは、意外にもわずか手のひら半分ほどの深さだった。

命からうまれ命を育む

ジッパー付きビニール袋に腐葉土を入れて一日おいておく。袋の内側には水滴がついていた。まるで生きているようだが、じつさいは微生物がなかで呼吸しているためだ。落ち葉や死んだ生きもの、生きもののフン。かつて生きていたものが栄養を求める微生物により分解されたり、土ごとミミズに食べられたりすることで腐葉土へ変わる。コロコロとした粒子状の腐葉土は、ミミズの腸内粘液のおかげで固められている。そう考えるとぞつとするが、ミミズがいなければ良い腐葉土は生まれない。そして土を混ぜるのはヤスデやア

落ち葉の分解のながれ



① つもった落ち葉



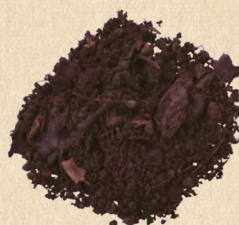
② 葉が黒ずむ

ぶ厚い落ち葉の層の下で

葉より分解されにくい小枝が目立つ



③ 葉が分解されくずれる



④ コロコロとした粒子が見える

木と生きる

昔うら山で農業をしていた人々は、腐葉土づくりに向いた落葉広葉樹であるケヤキ下の斜面をあえて選んだのではないか。そこで荷物を乗せた馬をひきながら歩いた。そうすることで地面が深く沈み込み、たくさん積もつ

こうして植物の生育に役立つ腐葉土は、自然界ではできるまでに2年以上かかる。そのうえ落ち葉がしつかり積もっていないと保温性が低く、土中の水分が凍ってしまう。冷たい土では微生物やミミズなど、土壌生物の活動がゆるやかになり、さらに時間がかかってしまうのだ。

リ、ダンゴムシ、ミミズたちらしい。彼らのおかげでできた腐葉土には窒素やリン酸、カリウムなど植物の生育に必要な成分が含まれている。さらに排水性や保水性、通気性を高める力がある。ちなみに正確には腐葉土は土ではないそうだ。土の定義は「岩の分解されたものと死んだ動植物の混ざったもの」で、腐葉土が腐植(※)となり粘土と混ざると土になれるようだ。つまり腐葉土は土ではなく土状の、天然の肥料ということになる。

た落ち葉で寒い都留でも土の温度が保たれる。おかげで冬でも元気な土壌生物たちが落ち葉を分解し腐葉土ができた。そうしてできた腐葉土を畑へ混ぜて作物を作っていたのではないだろうか。かつて畑が広がっていたうら山では人々の知恵によって、効率的な腐葉土づくりが行われていた。土を見ると昔の暮らしが見えてきた。人々の生活は木の営みとともにあったのだ。

赤松優香(国文学専攻1年) 文・写真



落ち葉が少ないため凍りついてしまった地面。踏むとサクサクしている(2020年12月21日)

※動植物の遺体が長い年月をかけてさまざまな化学反応を受けてできた分解されにくい無定形で暗色の物質。複雑すぎて、現代の科学でも部分的にしか構造がわからないらしい。【参考書籍】『土 地球最後の謎』藤井一至2018年

使って、飾って、観察する



シダーローズのつくり

◀ ヒマラヤスギの松ぼっくり（球果）で、「シダーローズ」は俗名。その名のとおり、バラのような形をしている。花卉のような部分は種鱗^{しゅりん}といい、下に種子が入っている。

◀ 種鱗のうら側。瓦状に並んで種子が熟成するまでなかで保護する。下の尖った三角の部分に種子が入っている。乾燥すると上半分が外側に反って開くことで球果から落ち、残った部分がシダーローズと呼ばれている。



本誌106号裏表紙に登場したシダーローズ。バラの形をした綺麗な松ぼっくりだから、しまい込んで終わりにしたくない。そう思っている、編集部員の渡邊さんがリース作りを教えてくれることになった。

冬の植物を探そう



リース作りに必要なもの。それは土台となる、よくしなる木、飾りにする植物、その飾りや土台を固定するツルらしい。それに加え今回は、シダーローズを追加で採取する。幸い都留市にはシダーローズのなるヒマラヤスギがある。しかし12月を迎えた冬にツルや飾りとなる植物は見つかるだろうか。

12月15日、一抹の不安を抱えながら渡邊さんとヒマラヤスギの生える薬山へ向かった。坂道を登っていくと斜面に、両腕を回しても届かないほど太いヒマラヤスギがあった。その斜面下の地面には、シダーローズの種鱗^{じゅうらん}が絨毯^{じゅうたん}のように広がっている。絨毯のなかからシダーローズを探す途中にも種鱗の降ってくる音がする。その音を2、3回聞いたところ種鱗に隠れていたものを見つけた。小さいため、ほころびはじめのバラのようだ。10分ほ

ど探して4個の小さなシダーローズを見つけたことができた。ヒマラヤスギは都留市にこの一本しかないため取りに来る人が多いらしい。大きいものは先に来た人が持っていたのかもしれない。

シダーローズを見つけたあとは、薬山やうぐいすホール周辺を歩き回って、ツルや実を探した。こうして植物を探してリースを作ってみると驚くことがいくつもある。枯れたツルでもしっかり土台や飾りを固定してくれること。冬でもいろいろな植物があり、リースを華やかにしてくれること。冬に植物は見当たらない。そう思っていたけれど意外とたくさんさんの植物に出会えるものだと感じしてしまった。見つけたものは実がほとんどだ。これは春が来れば種が芽吹けるように準備していたためだろう。

シダーローズは松ぼっくり？



冬の植物探しから植物の力強さや計画性を知ることができたが、当のシダーローズについてはいくつもわかっていない。ヒマラヤスギにできるなら松ぼっくりではなく杉ぼっくりではないのか。図鑑を使って調べると、ヒマラ

ヤスギはスギに似た葉の形から名づけられたマツ科の樹木らしく、松ぼっくりで間違いないさそうだ。シダーローズの種鱗は乾燥して水分が抜けると、収縮し反り返って開く。たしかに作ってしばらく経つリースのほうを見ると、拾ったばかりのときより種鱗が開き、バラが花開いたかのようだ。小さなものだって開いて大きくなる。シダーローズは採取後の発見がある松ぼっくりだった。リースとして飾ることがきつかけとなり、開いていくようすをじつさいに観察して知ることができた。

* * *

冬は飾りに使える植物が少ない。けれど冬だってたくさんさんの植物が静かに、大切な活動していた。花を咲かせたり葉を青々と茂らせたりするかわりに、やがて訪れる春に向けて次の世代となる種をつくっている。冬だからこそ出会えたシダーローズやたくさんさんの木の実。リース作りを通して、季節の植物の営みに思いを馳せることができた。冬は植物たちにとって大切な時間だったのだ。

赤松優香(国文学専攻1年) 文
渡邊唯(地域社会学科2年) 写真

とちまんぶくの 記憶

「残したい木がある」。都留市与繩に
住む前田太二さん(71)から1枚
の木の写真が届いた。人が前に立っ
ているから木の大きさがよくわか
る。この巨木にはどんな物語があ
るのだろう。気になって前田さん
にお話をうかがった。

渡邊唯(地域社会学科2年) 文・写真



防災まちあるきで沢を登ってトチノキまで(2019年3月17日)

都留市与繩日向地区の太平山に佇むトチ
の巨木。地元の人には「とちまんぶく」と呼
ばれている。「トチの実のおまんじゅう」と
いう意味だが、なぜそう呼ばれているかは
分からない。ここはもともと集落の共有地
で、この木は「デクチ」と呼ばれる水源地の
シンボルだった。傾斜がきつい山のなかの
標高610メートル地点に立っている。現
在ではほとんど人の立ち入りはないようだ。
昭和50年ごろまでは、この水源地で人び
との飲料水を得ていたそう。集落まで導

水管を引き、水源地や水路の管理を共同で
行っていたという。現在、飲料水は市の上
水道に切り替わった。デクチは使われなくな
り、倒木などで道が通れなくなっている。
現在も水はあり、雨が降ると沢から水が出
ることもあるそうで、かつての水源地の記
憶をとどめている。

デクチのシンボルであるトチの木は、集
落の人びとが「水に命を繋いでいただいで
いる」と、神様のように大切にしていた。
そのため、市の上水道が普及したあとも地
域の人の手でずっと管理されてきた。しか
し、その習慣もしだいに薄れてしまった。

前田さんは子どものころよくデクチに遊
びに行ったそうで、「大人になって集落を
出た仲間も『とちまんぶく』という感覚
ていまず」と話してくれた。自分たちの祖
先が山を整備して繋いだ命の水。「とちま
んぶく」はふるさとの木として、集落を出
た人の記憶にも残り続けている。前田さん
はこの木を子どもや孫たちの世代にも見せ
たいと語っていた。命の水があったから今
の自分がいる。その繋がりを大切にする前
田さんのすがたに心打たれた。



木とともにある記憶

木が私たちに言葉を残すことはない。

ただしずかに私たちを見守ってくれている。

見上げていた大木が人と助け合いながら

困難を乗り越えたことを知った。

木を通して、知らなかった世界が見えた。

いつしか消えていた落ち葉の行方を知って

自然は巡っているのだと気付かされた。

今回の特集では

木とともに生きていた人が、

木が残してくれた環境が、

私たちに記憶を伝えてくれました。

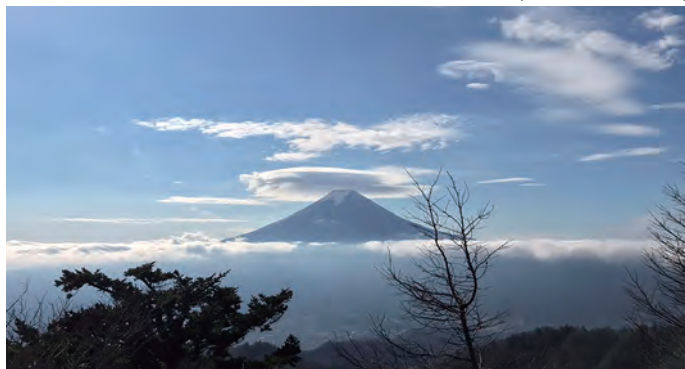
三つ峠

「壮大」という言葉がよく似合います。苦勞して登った先での景色は感動もひとしおです。夏と冬で雰囲気がガラリと変わって見えるのも三つ峠の魅力です。

〒402-0304 山梨県南都留郡西桂町加河口



(2019年8月4日)



(2020年12月6日)

都留からみえる富士山

富士山からもっとも近い公立大学である本学ですが、キャンパス内から富士山を見ることはできません。そこで私たちはキャンパス周辺で富士山を見ることができる場所を探しにいきました。地図中の☆印が富士山の見えるポイントです。

勝山城跡

広がる谷村のまちなみは、かつて城下町であったことを思い起こさせてくれます。ひょっこりと顔をのぞかせる富士山がかわいらしいです。

〒402-0055 山梨県都留市川棚



(2020年10月25日)

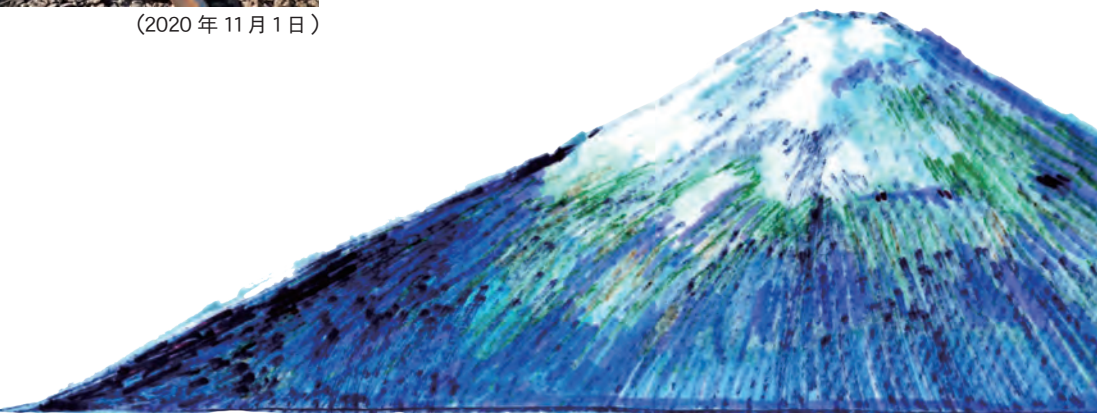
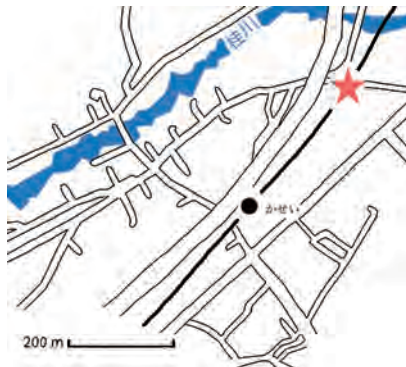


(2020年11月1日)

禾生

手動式の遮断機をあげると、そこには富士山がありました。「こんなところからでもみえるんだ」。思わずつぶやいた言葉は『都留からみえる富士山』を企画したきっかけになりました。

〒402-0004 山梨県都留市古川渡



(2020年12月15日)

下谷

都留バイパスの先が富士山へとつながっているようです。なだらかな青い稜線が美しく映えています。

〒402-0051 山梨県都留市下谷



「おなん」を知っていますか



勢いよく淵に流れこむおなんの滝

都留には水にまつわる話がたくさんある。富士山から湧き出る天然水であったり、川からひっぱってきた生活用水であったりと、さまざまな形で水が私たちの生活になじんでいるからだ。今回はそのなかで、青色に輝く淵に目を向ける。当時の都留市民とおなん淵の工ピソードからどのような関係がみえてくるだろうか。

おなん淵の「おなん」って？

「おなん」ってなんだろう。あまりに聞きなれない響きなので「おなん」を辞典でひいてみる。国語辞典では見つけれられない。百科事典でとうとう見つけれられたのはモンゴルにあるオナンという川。「まさか、モンゴルの川の名前なわけないよね」ともややよとした気持ちのまま辞典を閉じた。

私が気になっていたのは、東桂にあるおなん淵だ。「おなん」と聞いただけではなんの名前かも分からない。今は使われていない土地の名前なのか、もしくは私が知らない甲州弁だろうか。名前が気になればおなん淵のすがたも気になる。私はさっそく、おなん淵にむかった。

「おなん」に会いに

おなん淵は東桂駅から10分ほど歩いた先にあるらしい。桂川^{かつがわ}を横目に見ながら細い道を進んでいった。1月の冷たく鋭い風が体を冷やしていく。太陽は出ているが、日光だけでは体はなかなか温まらない。「少しでも体温を上げよう」といつもより早足で目的地にむかった。

細い道を抜けると、桂川とは違う川を見つけることができた。近くに行けば、ごつごつ



白い波を立てて流れる鹿留川

とした岩場を流しそうめんのように勢いよく水が流れている。流れた水は桶のように丸い水たまりに注がれていた。淵とは一般的に、底が深く、水が溜まっている場所のことをいう。つまりこの水場がおなん淵のようだ。お

なん淵に到着して一番初めに目についたのは水の青さ。おなん淵に流れ込むのは桂川の支流である鹿留川の水だ。透明度の高い水に屋下がりの太陽の光がさしこむので、水面が反射して青く見えているのだろう。澄んでいる水で満たされているところではないと見ることでできない光景に心が落ち着いていく。写真を撮ることも忘れて、しばらくその場にどまつてしまった。

東桂に伝わるおなん伝説

おなん淵からほんの少しだけ上流に歩いていくと、おなん淵を紹介する立て看板を見つけることができた。「おなん」というのはなんと人名であるらしい。「昔、村の長者におなんという少女が奉公していた。ある日、その長者が大切にしていたお椀を割ってしまった。長者は娘をひどく叱りつけてしまう。叱られた娘は淵の上から身を投げてしまった」

というのが由来だそう。同じ東桂に太郎・次郎滝という場所があるが、そこでも滝に落ちた人が名前の由来になっていた。川が身近にあるからこそ、川と人間の関わりが分かる名前が付けられるのだろう。

「それにしても太郎・次郎の滝といい、おなん淵といい、人間が川に身を投げすぎなのでは……」と心のなかでツツコミを入れてしまう。また、おなんが身投げしてから、村内で人が集まる前の日の夕方に「お膳を十膳お貸しください」と紙に書いて淵に浮かべておくと、翌朝お膳が行儀よく浮かんできて、当時の村民がこれを利用したという伝説もあるらしい。村人が10膳借りたにも関わらず、5膳しか返さなかったため今は貸してくれない、と言われている。これがもし、おなんさんのやったことなのだとしたら、彼女の可愛らしい一面を見ることができたようではほえましくなる。

* * *

おなん淵は人間から名前を受け継いだ伝統ある淵だった。これまで私は、風景に人間の名前が付いているのはなんだか不思議なよう

な、しつくりこないような気がしていた。しかし、それは都留という水に恵まれた土地においては、おかしなことでも何でもないようだ。川や滝といった、日常に欠かせない水を獲得するための場所が身近にある。だからこそ、水にまつわる伝説や言い伝えが存在する。これからも淵の水は絶えることなく続いていくだろう。そして、「おなん」という名前も継承させられていく。「おなん」は、この淵について興味を持った未来の世代にも水と住民の関係について教えていくのだろうか。

佐藤優美（国文学科1年）Ⅱ文・写真





ファイルに収められた絵にはめずらしい山野草も描かれていた。たずねると、「これはね……」と笑顔で教えてくれる川辺さん

絵が つなぐもの

青松笑子（比較文化学科 1 年）＝文
高木帆月（比較文化学科 1 年）＝写真

川辺健一さん（81）は「サイクルセンター川辺」という自転車屋さんを営むかたわら、趣味で植物画を描いている。本誌89号（※）の取材では、山野草の絵を描くことの魅力についてお話してくださった。当時の記事には川

辺さんが描いたマムシグサの絵が掲載されているが、その絵は葉・茎・実のどれをとっても本物のように繊細に描かれていた。文字には書く人の性格や癖があらわれると言いが、絵も同じなのではないだろうか。私はマムシグサの絵を描いたその人柄を知りたいと思い、お話をうかがった。

あたたかな初対面

冷たい風が吹くなか、12月4日の夕方にお店を訪れた。川辺さんは『フィールド・ノート』。わかる、わかる」と顔をほころばせ、こころよく受け入れてくれた。さっぱりとしたその笑顔に、私の心はすぐに魅きつけられた。お店の奥に入ると、棚のフックにかけられている本誌89号が目に入った。5年前の取材を大切にされるようすから、縁を大事にする心が伝わる。店内の石油ストーブのあたたかさも相まって、思わず私は頬をゆるめた。

人柄のあらわれる絵

川辺さんが絵を描き始めたきっかけは小学生のときに授業で行った彫刻だった。滝の絵を板に彫ってみたところ上手くいき、しばらくはその絵ばかりを描いていたという。漫画家を目指すようになってからは、学校をさぼる日もあった。そのような日はかばんいっぱいに漫画を入れこみ、友人と二人で河原に絵を描きに行つたそう。当時の様子を想像すると、夢中で絵を描きたい気持ちが私にもぐんぐんと湧きあがってくる。

お話の途中、川辺さんは一冊のファイルを手渡してくれた。そのファイルには何枚もの山野草の絵が収められていた。特に目を引いた一枚を眺めていると、「これはね、山の花でシャクヤクって言うね」と身をのりだして説明してくださった。なんでも、山から自分でシャクヤクを採ってきたが、絵にしようと思った次の日にはすべて散っていったそう。『美人薄命っていうじゃん。これがそのことかと思つて』。美人をあらわす「立てばシャクヤク」という言葉があるが、それを実際に体験した人はきつとそれほどこないだろう。

このお話には、自分で山野草を採ってきて調べる川辺さんらしきがあふれている。「調べたないと、人に聞かれてもわかんないじゃん」と笑う。その飾らないすがたがありのままに描かれたシャクヤクの絵と重なった。

みどりの色鉛筆

48歳のとき、川辺さんはボタニカルアート教室に入った。30年以上前にその教室の先生から購入した色鉛筆セットを今もつかっている。そう言いながら、12色セット用のブリキケースを取り出した。見せていただくと、そのなかには異なる色味をしたみどりの色鉛筆が何本も入っていた。一本一本が大切に使い込まれていて、描く人の手にしつかりとなじみそうだ。最近の色鉛筆から出る鮮やかで多彩な色を「俺の色鉛筆じゃ出ない」と川辺さんは言う。それでも、ファイルに収められた絵に足りないものは感しなかった。川辺さんの絵は、色の濃淡や質感を変えて描かれている。限られた色のなかで考え抜いて生み出されるものだから、それは繊細で優しい魅力をもつ。16年間通ったボタニカルアート教室を辞めたのち、川辺さんは絵の教室を開いた。17年

間続くこの教室は月に2回開かれ、おもに町の人に通っている。過去には生徒さんが自分たちで描いた花をTシャツに印刷したこともあったという。少しはにかみながら、「オリジナル」と言ってそれを見せてくれた。ボタニカルアート教室の先生から受け取った色鉛筆のように、このTシャツも絵がきつかけとなった出会いから生まれた。人との出会いをお話するとき、川辺さんはいきいきとしてまぶしい。「いや、やつぱりね、この絵を描いていればどういいう人との出会いがあるかなって。それが楽しいね」とかみしめるように言う。出会いを楽しむ気持ちがあらわれるため、川辺さんの絵は周りの人を引きつける。マムシグサの絵がきっかけでお店を訪れた私もそのうちの一人だ。絵はこれからもこうして人と川辺さんの出会いを生むのだろう。

* * *

私は勉強するふりをしてノートにこつそりと落書きをしているような小学生だった。以来、描くことが好きで趣味で絵を続けてきたが、最近少し変わったことがある。それは、インターネットに絵を投稿するようになり、

描く目的が人とのつながりになったことだ。やりかたや立場は違っても、絵を通して人との出会いを楽しむという点で私と川辺さんは似ているのかもしれない。

自分が楽しむための絵なのだろうか。それとも、人と出会うための絵なのだろうか。以前は描く目的が変わってしまったことに戸惑いがあった。それでも、目的の根っこに描くことを楽しむ気持ちがある川辺さんのありかたが私の道しるべになった。

お店を出たのち、私は新しく絵を描いた。これは誰との出会いをつないでくれるのだろうか。わくわくした気持ちで完成したものは、いつもより迷いのない線で描かれていた。



自転車を修理する手に、自転車屋さんや絵の先生としての積み重ねを見た

柄の絵



ベッドにおかれているのは完成した作品だ

親友がアパートの自室で営む革工房。目立つた宣伝がないなか、着々とファンがふえている。作品を手にとるとやさしい気持ちになれるのはどうしてだろう。その秘密をさぐるため、取材をお願いしてみた。

二足のわらじ



雲ひとつない晴天なのに、コートを着ても肌寒い。そんなことを感じながらインターホンを押すと、気の抜けた「やほう」という声とともにドアが開けられた。喜連川羅々佳(20)、の文字並びとは対照にボメラニアンにたとえられる愛らしい本学の2年生だ。私の親友でもあり、ふだんの呼び名どおり「らあ」として紹介したい。らあは学業のかたわら革工房「柄の絵」を営んでいる。しつくりきた響きだったという店名にあえて特別な意味は込めなかった。ものを大切にする、環境にやさしい暮らしを体現するためだろう。ものがあふれる現代に、その決意の固さが眼差しからみてとれた。「生活のなかでものを大切にする、ふつうの生活なんだけど、なぜか幸せになれるから。だからいろんなひとに自分が持っているものは大切だと思って

らえたら愛情深い人生になる」。しゃべるの
苦手なんだよねと、小さくなる彼女の言葉は
どこまでも純粹だ。

思い入れと暮らす



そもそも、らあが革製品を好きになっ
きつかけは中学生から愛用しているリュック
だ。はじめはその革ポケットのデザインに惹
かれ手に取った。やがて革の持ちのよさに興
味を持ち出したという。大学生になって本格
的に道具をそろえた。高校3年生のときに、

友達が雑誌の付録でつくった革のパスケース
をみたのを思い出したことも後押しした。彼
女にとつてもものづくりは生活の原動力だ。「つ
くらないと心が死ぬ」と、けろつと言つての
ける。事実、らあの部屋にある絵画やリー
ス、棚にいたるまで手づくりされたものばか
りだ。このアパートのひと部屋でらあの心が
こめられている。作品への想いをたずねると
「みんなに大事につかつてほしいなあ、なが
く。」とこぼした。彼女の言う、ながくは「永
く」だろう。らあはみえない時間をこえて「た
いせつ」のバトンがわたされるものが好き
だった。着心地ばつぐんの古着、ひとり旅

行でお土産に買った巻貝のピアス、お母さ
んのおさがりである足跡のリング、どんな味
が出るか楽しみな革靴、そしてはじめて作っ
た革のポシェット。らあは今日もお気に入り
につつまれている。一緒にいる私もいつのま
にか、らあを通してものにやさしい視線をむ
けていた。持ち主でない私がそれぞれの思い
出を語れるほどだった。らあは「そういうも
のしか持つちゃいけない気がする」と誰へと
もなく言い切った。

「たいせつと」生きる



大切にすること、大切なものになる。大
切にされるから、大切にしたいくなる。そんな
雰囲気やらあ自身もまもつていた。だからこ
そ、らあの周りではたえずご縁がつむがれて
いく。らあは今まで友人からの注文で、財布
やトートバック、パソコンケースにいたるま
でいくつも手がけてきた。最近では近所のカ
フェにも作品をおき、ふるさと納税にも協力
している。今では、どんな想いも形にするこ
とが目標だ。らあは作品のお届けに、お礼の
手紙とささやかなお花をそえる。わざわざこ
の工房を選んでくれてありがとうの気持ちだ

そうだ。らあと話していると、むねに春風が
ふくような心地よさがある。みんなその風に
誘われ、ここにふれる作品を近くに置いて
おきたくなるのだろう。だれかに話したくな
るほど大切なものは、質や値段にかぎらず日
常に華やぎをあたえてくれる。私は彼女から
誕生日にもらったアラスカグリーンの名刺入
れをそつとなでた。ものをつうじて「たいせ
つ」を実践しながら生きる彼女はこれからも
私のあこがれだ。

丸谷美寧（国際教育学科2年）Ⅱ文・写真



らあと生活をともにする「もの」たちはどこか満足げだ

つるを味わう

都留には、湧水や寒暖差の激しい気候をいかして作られた特産品がたくさんあります。今回は本誌 105 号に引き続き、そんな都留の食材を使って料理を試してみました。身近な場所で収穫されたものをあたたかい料理にして味わうと、まだ寒さが残るこの季節も乗り切れるような元気がわいてきました。

深沢有佳（比較文化学科 2 年）＝文・写真



富士湧水ポーク

富士湧水ポークの ゆず照り焼き

まず下味をつけて豚肉を焼きます。火が通ったら、玉ねぎそして酒やみりん、砂糖、しょう油を絡めたゆずの皮を合わせて煮詰めるだけ。ゆずのさわやかな香りとともに、ごはんが進むおかずの完成です。小ぶりのゆずは調理しやすく、ほどよい酸味が豚肉とよく合います。

都留市産のゆず

つるくびかぼちゃのタルト

細長い形のつるくびかぼちゃは種が少なく簡単に調理でき、濃厚な甘みがあるのが特徴です。クッキーを砕いて土台を作り、バター、ゼラチン、生クリームとレンジで温めたかぼちゃをミキサーにかけます。それをクッキーの土台に流し込み、数時間冷やしたら濃厚なタルトのできあがりです。自然な甘みに癒やされました。



都留市産の
つるくびかぼちゃ

ムササビ 観察日記

- 7 年目 -

2013 年、本学のキャンパスにある森「ムササビの森」に2つの巣箱を取り付けました。ムササビの様子は本学ホームページのムササビライブカメラ (<http://www.tsuru.ac.jp>) でご覧になれます。あたたかく成長を見守ってください。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真

12 月 23 日 向きあって



2 頭が顔を寄せ合うようなしぐさが見られました。寝心地がいい場所を探しているように見えました。

12 月 24 日 ぴったりです



手を顔の近くに持って行って丸まっています。樹皮を細かく裂いた巢材のくぼみにピッタリと収まっていました。

12 月 30 日 同じかっこう



はじめは 1 頭で眠っていましたが、いつの間にか 2 頭になっていました。並んで丸くなるすがたがお寿司のお稲荷さんみたいです。

12 月 31 日 尾をまくらに



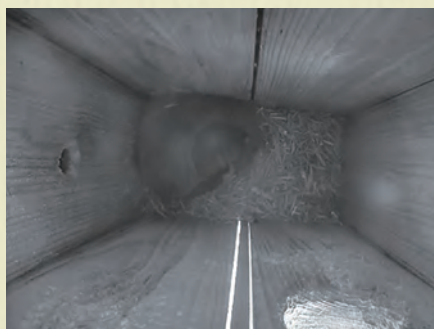
丸まって寝ていましたが、数時間後には、尾に顔をうずめる姿勢になっていました。尾が枕の働きをしているのでしょうか。

1 月 14 日 我がもの顔



最近ではキツツキがよく入っています。アオゲラという種類です。夜になるとムササビのいない巣箱で寝ています。

1 月 15 日 この日の寝相



きれいに丸まって寝ているようすがたびたび見られましたが、この日はうつぶせに近い姿勢で寝ていました。



こだわりの宿るパン

東桂駅を下車して、国道 139 号線を河口湖方面へ徒歩 7 分。自家製酵母パンと書かれたプレハブ小屋が建っている。そこが「パン工房^{みのり}稔」だ。自家製酵母パンの文字に引き寄せられ、お店の扉をあけると「いらっしやい」と店主の鈴木稔^{としひろ}弘さん(45)のあたたかな声とともに小麦粉のいい香りがした。

阿部くるみ(地域社会学科 1 年) = 文・写真



自家製天然酵母

パン工房稔で作られるパンは、レーズン酵母を使っている。酵母とはパンを作るのに欠かせないものだ。この酵母が発酵するときに出るガスによってパンが膨らむ。その一つが天然酵母である。天然酵母には果実やヨーグルトを使ったものがある。

鈴木さんに、数ある酵母からレーズン酵母を選んだ理由を尋ねた。ほかの酵母は作る環境に左右されやすいが、レーズン酵母は安定して作ることができるからだそう。稔のパンは、一部を除き生地に乳製品や卵を使っていない。そのため都留市内にあるほかのパン屋さんとは違い、やわらかな食感ではなく、硬めの食感のパンが特徴である。なるべくパンを作る材料をシンプルにすることで、小麦本来のおいしさや酵母の風味を楽しんでもらいたいという鈴木さんのこだわりの一つだ。

鈴木さんから「粉の風味が一番感じられるのはこれ」とおすすめしてもらった山梨コッペをいただいた。噛めば噛むほど口の中で甘みが広がる。おいしくて、ものの数分で食べきってしまった。パンをよく知るお客

さんは店内に入っただけで、においの違いに気がつくという。「だいたいの人は柔らかく甘い匂いのする菓子パンしか食べたことがない。だから正直売れないんだよね。でも僕はこれがおいしいと思ったから」。こだわりを貫くことへの思いが伝わってきた。

入りたくなるお店

取材を進めていくと鈴木さんから「よくこんなプレハブ小屋に入ってみようと思ったね。ためらわなかったの?」と逆に質問を受けた。パン工房稔の看板は店の裏にあり、気がつきにくい。私は、店名よりも自家製酵母パンの文字が目に入って気になったからだと言った。すると「それが狙いです」と少しうれしそうな声がかえってきた。店名よりも、こだわりのパンを売っていることをわかってもらうために、あえてそうしているそうだ。私はまんまと鈴木さんの策略にはまっていたのだ。県外からくるお客さんもお店の外観にある自家製酵母パンの文字に引き寄せられて来店することが多いという。どんなパンが売られているのか気になり、立ち寄った人だけが稔のパンを味わうことができるのだ。



①パンを切る鈴木さん ②いろいろなパンが並ぶ ③外観からはパン屋だと想像がつかない ④興味をそそる看板

思いが稔る

パン工房稔は、鈴木さんが12年前にはじめた。店名の「稔」の由来は、ご自身の名前から一文字入れたかったことと、穀物が「みのる」という言葉にはこの漢字を用いること。そして、パンを食べたお客さんの笑顔や幸せが「みのる」ようにという願いが込められている。

鈴木さんはパン工房を始める前に、建築業の仕事をしていた。当時、職人さんに差し入れてもらったパンがおいしく、工房を始めるきっかけになったという。その後、パン職人になるため関東地域にあるチェーン店で働きながら勉強を重ねた。そのさい、レシピなどを書き留めておくメモ帳がベタベタになってしまうほどの添加物を入れてることに疑問を感じたという。そのことから自身の工房では添加物や保存料を使わずにパンを作ろうと決めたそう。

早朝から行うパン作りが中心となった生活では、趣味に時間をとることができなくなってしまうという。しかし店先にあるOPENと彫られた木の看板は鈴木さんが自

ら作ったものだ。「趣味とまではいかないけど」と少し遠慮がちにつぶやいた。前職の建築業も作ることにつながる仕事だったことや、手作り看板のお話を聞いて、昔からの作りが好きだったのか気になっていると「たぶんそうだった。なにがといったわけではないけど、好きだったと思う」と鈴木さんらしい言葉が聞けた。

* * *

作業風景を撮影していたとき、鈴木さんがパンを食べさせてくれた。フランスパンの生地にチーズとコショウがはいったものだった。「おいしい」と食べていると鈴木さんから「どんなふうには？」とつっこまれた。取材中も何度か空気が変わる瞬間があった。いっだろうと思えば返すと、パンについて聞いているときだった。どんな質問にもまっすぐに目を見て受け答えをしてくださる姿勢は、パン作りへの姿勢と重なることに気がつく。こだわりという頑固そうに思えてしまうかもしれない。しかし鈴木さんから伝わってきたこだわりは強くて硬いものではない。しなやかで芯の通った好きなものへの思いだった。

都留が恋しくイ

私が住んでいる場所は、山梨県の南アルプス市。大学からは電車を乗り継いで片道2時間ほどの場所にあるまちだ。去年まではあたり前のように電車で通学していたが、感染症の流行によりそれが難しくなってしまった。家にこもってオンライン授業を受け続け、都留にいたいという気持ちが強くなっていく毎日。そんなとき、夜空を見上げて考えたことがあった。

深沢有佳(比較文化学科2年)=文・写真
芦澤由恭さん=写真提供



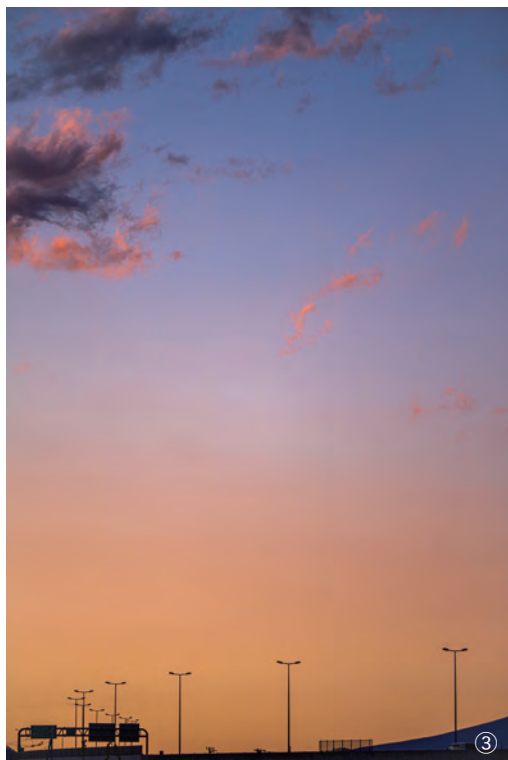
星空を眺めて

その日の大学のオンライン授業をひととおり終え、ふと夜空をみたときのことだ。澄み切った空のなかに星たちが美しく輝いている。授業の疲れを癒してくれているようだった。「うわあ」と思わず声が漏れる。

またその景色が、去年都留市でみた星空と重なった。大学からの帰りが遅くなってしまったとき、電車を待ちながら駅で見た星空。真つ暗闇のなかで光る星をみて、心があたたかくなった。

そんな記憶をたどりながら、都留市の景色とは違う点にも気づいた。私の家でみる星空は、どこまでも広い。山が都留市よりも遠くにあるからだろう。壮大な空に、星が点々と散らばっている。それぞれが少し距離をとりながら、互いを尊重するよう光を放っていた。

いっぽう、都留市でみえる星空は山が近いこともあるせいか、あまり広が



③

りを感じられない。しかしその分、星々が空にぎゅつと詰まっついて、すべての星が協力しあいながら輝いているようにみえる。暗がりのなかで、私をぼつと照らしてくれている気がして嬉しくなった。

夜空をみあげてから、私は自分の住む地域や都留市で見る景色にどのような共通点や異なる点があるのか、もつと知りたくなった。家のまわりをじっくり観察してみよう。そう決めた私は、写真が趣味だという友人にも協力してもらいながら、自分の住む地域をめぐってみることにした。

新たな発見

まず発見したのは水だ。南アルプス市の標高が高い地域に行くと、透きとおった水が流れていた。川の底がはっきりと見えるほど澄んでいるのは、都留市の水も同じだ。しかし私は、ほとんど訪れたことのない、山のふもとのようにまで来なければ



④



似たような水がみられないことに驚いた。都留市ではまちじゅうの水路で、飲みたくなるほど透明な水が流れている。住民がすぐ手に届くようなところで発見できるのだ。同じような水を求めてぐんぐんと山のほうへ車を走らせた私は、改めて都留市の水の身近さに感心した。暮らしになじんでいる鮮度の高い水をもっと大切にしたいくなった。

また一月に降った雪をみて、都留市を思い出した。どちらも寒くて家から出たくなくなるのは変わらない。しかし自分の住む地域に降った雪は水つぼく、あまり積もらずにすぐ溶けてしまった。たしか去年都留市で雪が降ったときには、ずつしりつと重い雪がしばらく積もっていたような気がする。真っ白になった木々を眺めながら、一步一步踏みしめて大学前の坂を上った記憶がある。都留市での思い出に浸りながらすぐに溶けていく雪をみて、小さいころから雪遊びが好きだった私は、

少しがっかりしてしまった。

さらに、私が住む南アルプス市と都留市ではどちらでも美しい朝焼けや夕焼けがみられるが、それぞれに違った美しさがある。南アルプスでは、遠くにたえずむ山々の稜線を日が照らし出すようすがみられる。まち並みの景色も加わって、ずっと眺めていたい心地になった。いっぽう、都留市では標高が高いせいか、空をぐつと近く感じられる。太陽も迫力満点だ。また空気が澄んでいて山が近くにあるため、朝焼けを見ると、つい山を歩いて植物などを観察したくなってしまう。身近に自然と触れ合える都留市だからこそ感じられることなのだろう。

私の住む地域と都留市を比べながら観察してみると、まったく新しい発見ができた。住み慣れたり、かよい慣れたりしたまちなのに、いつもとは違った驚きや感動があり、改めてどちらの地域も好きになった。これからも大切にしていきたい。

* * *

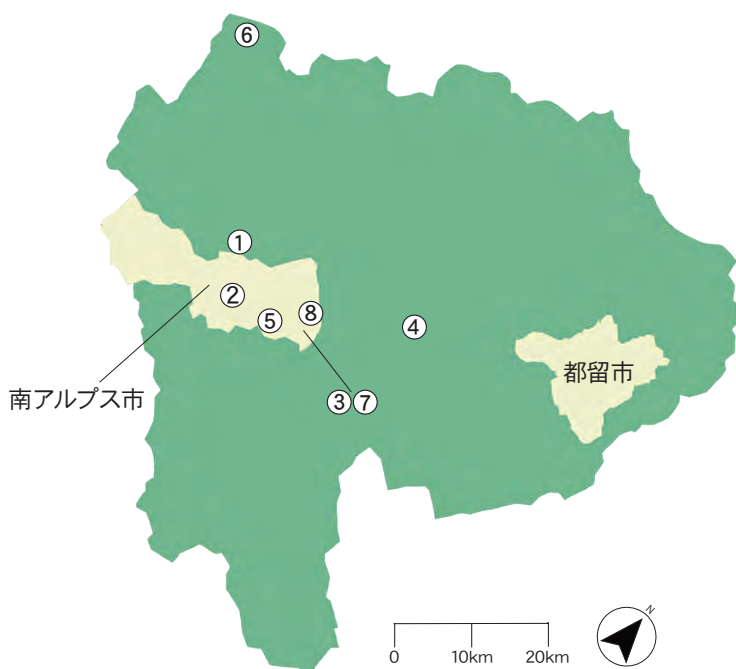
感染症によって、日常が一変した。今までのように思いどおりに生活することができなくなり、もどかしく感じる日もあった。しかし、そんなときだからこそできた発見だ。都留が恋しくなり思いを巡らせなければ、今回のような気づきは得られなかっただろう。

ふだんとは違う経験したことのない事態が訪れると、最初はどうすればよいのかわからず戸惑ってしまうこともある。しかしあせらず日々の心の動きを大切にしていれば、そのときならではの発見ができるはずだ。これからもじつくりと身近にあるものを観察し、自分の気持ちを書き留めていきたい。

つらくなったときは、友人にも協力してもらって撮り溜めた、今回の写真を見つめ返してみる。心が落ち着き、もう一歩前に踏みだす力を与えてくれるはずだ。

各写真の撮影地

- ① 韮崎市甘利山
- ② 南アルプス市
芦安小学校付近の川
- ③ 南アルプス市若草ランプ付近
- ④ 笛吹市八代ふるさと公園
- ⑤ 南アルプス市中野の棚田
- ⑥ 北杜市美し森
- ⑦ 南アルプス市若草ランプ付近
- ⑧ 南アルプス市
遊・湯ふれあい公園付近





センサーカメラが写した動物たち

本学フィールド・ミュージアムでは、キャンパス内の森にセンサーカメラ（赤外線を感じると自動的にシャッターが切れるカメラ）を設置して動物の調査をしています。今号では 2020 年 9 月～11 月のあいだに撮影された動物を紹介します。本誌 105 号と同じ場所で撮影しました。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



アオゲラ

📷 ムササビの森（2020 年 9 月 29 日）

ムササビの森に設置している巣箱にも昨年の秋からアオゲラが入るようになりました。日本固有種で果実や昆虫などを食べる雑食性です。



ニホンジカ

📷 ムササビの森（2020 年 10 月 2 日）

近年、本学ムササビの森で頻繁に記録されています。これは、後脚で頭を掻くようすです。よく見るとうしろにもう一匹写っているのがわかります。



アナグマ

📷 自然科学棟（2020 年 11 月 18 日）

アナグマも本学キャンパスに設置したセンサーカメラに頻繁に記録されるようになりました。この写真では、足裏が写っています。鋭い爪で地面を掘りミミズなどを食べます。



タヌキ

📷 自然科学棟（2020 年 11 月中旬）

タヌキもキャンパス内で目撃されるようになりました。木の実や昆虫などを食べる雑食性です。この写真では、ミミズをくわえているようすがはっきりと写っています。

ハクセキレイ



フィールド暦

だんだんと気温が下がり、まちの木々や動物たちまでも寒そうに見えます。昨年の12月から今年の1月にかけて、冬の生きものたちのすごしかたをのぞいてみました。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真



コウモリの仲間

本学の自然科学棟からコウモリが落ちているという連絡がありました。形の似た仲間が多いので、種は特定できませんでした。

撮影日：2021年1月5日
撮影場所：本学



カメノコテントウ

日本で最大級のテントウムシです。全長は1cmを超えていました。クルミの葉につくクルミハムシを食べるそうです。

撮影日：2021年1月2日
撮影場所：本学



モズの速贅^{はやにえ}

モズの仲間には捕らえた獲物を木などに突き刺す習性がありますが、これを「はやにえ」と呼びます。写真の獲物はミミズです。

撮影日：2020年12月17日
撮影場所：うぐいすホール周辺



カマキリの卵

本学図書館のドウダンツツジの生け垣で見つけました。カマキリの種類によって卵のかたちが違うそうです。

撮影日：2021年1月20日
撮影場所：本学図書館周辺

冬を越す

本誌99号の裏表紙にのっていた、集団で越冬するテントウムシに目がとまった。冬は生きもののすがたは見えにくくなってしまふ。しかし、いなくなっただけではない。次の春までたくましく生きている。そんな生きものを観察してみようと散歩にでかけた。



一か所にたくさん集まっているテントウムシ (2020年12月8日)

集団で冬を越すテントウムシ

テントウムシを探しに自然科学棟に入った。まず、入り口のあたりを見てみたがテントウムシは見つからない。階段を上がると、黒い点が何個か見えた。「もしかして」。近づいてみると、やはりテントウムシだった。壁の隙間にくっついていて、見上げると、天井には10匹ほどのテントウムシがじつと集まっていた。多くが黒地に赤い点が2つあるテントウムシだ。そのなかに、赤字に黒い点は何個もあるテントウムシが混じっている。1匹だけ違う模様をしているのが、おつちよこちよいで混じってしまった子のように見えて仕方ない。テントウムシにもそんな子がいるのかなと思うと、笑ってしまった。

図鑑を見ると、このテントウムシはみな同じナミテントウムシという種類だった。背中模様はメンデルの法則(※)で変わる。西日本には黒字に赤い点が2つあるタイプが多い。背中模様には遺伝の関係があったと知り、笑ってしまったことが申し訳なくなった。身近な虫でも、模様のことすら知らなかったことに驚いた。



壁の細い隙間に集まっている (2021年1月13日)

自然科学棟に来るテントウムシは1980年ごろには10万匹もいたが、2018年には、8000匹まで減ってしまったらしい。その理由はよくわかっていない。一度観察したけれど、そんなにいたかなと思ひ、数えてみることにした。テントウムシは小さく、壁の隙間にいるため見落としやすい。そうかと思えば、目の前にいるのに気づかない。何匹数えたか不安になりながら数えていくと、その数は100匹ほどしかないかった。見落としや、入れなかった場所にいたテントウムシを含めても、数は多くないだろう。自然科学棟で話

※メンデルがエンドウの交配実験から明らかにした法則。対になる形質のものを交配すると優性形質と劣性形質が現れるという優性の法則、分離の法則、独立の法則からなる

しかけてくださった職員さんも年々減つてい
ると言っていた。昔は階段の隅にもたくさん
いて、踏んでしまいうになるほどだったそ
うだ。今年は自然科学棟の塗装工事の影響も
あるかもしれない。そうだとすると来年、テ
ントウムシが戻って来るのだろうか。私が知
らないところで、環境がだんだんと変わって
いるのかもしれない。

うら山へ

冬を越す生きものは、ほかにたくさんい
る。テントウムシだけではもったいない。そ
う思った私は、うら山でも越冬する虫たちを
探してみることにした。11月に友達とうら山
へ行つたときは紅葉がきれいで、ときを忘れ
て写真を撮つた。その後、一ヶ月のあいだに
紅葉の赤や黄色という派手な色はなくなり、
もちろん夏の鮮やかな緑色もない。そんなう
ら山がさみしく思えた。たまに強く吹く風に
怖さも覚える。虫や鳥の声は聞こえず、落ち
葉を踏みしめるカサカサした音がよく聞こえ
た。落ち葉の種類が変わると、音も感触も変
わる。うら山に冬がやってきたのを感じるこ
とができた。

緑色のまゆ

登っていくと、1.4メートルくらいのも木が
並ぶところがあった。そのなかで、もう葉つ
ばは落ちているはずなのに、葉っぱのような
ものがついている木がある。緑色が何もない
木によく映えていた。触ってみると、硬くて、
びくともしない。上には穴があいているけれ
ど、なかをのぞいても何も見えずよくわから
ない。調べると、ウスタビガという蛾のまゆ
であることがわかった。さつきまではなか
か見つからずに苦労していたのに、このまゆ
は簡単に見つかり、拍子抜けしてしまった。
上にあいていた穴は春に成虫が出てくるため
の穴のようだ。下にも穴があいており、そこ
から雨水などを排出するという。ただ冬を越
すためだけでなく、春に出てくることによ
うと決めた。

* * *

冬になると、私は寒くてこたつから動かな
くなってしまふ。しかし、生きものたちは小

さな体で厳しい環境を乗り越えなければいけ
ない。自分たちが見つけた自分たちだけの方
法で冬を越す生きものたちは、知恵のかたま
りだ。そして、思うように見つからないその
生きものたちを探すのはまるで宝探しのよう
だった。冬を越す生きものを探すという、私
の新しい冬のすごしかたを見つけた。

高橋杏佳（地域社会学科1年）≪文・写真



右：親指ほどの大きさだけれど、色のお
かげで見つけることができる
上：近づくとも葉脈のような模様がわかる
(2020年12月18日)





鍛冶屋坂を訪ねる

本学美術棟の教室の窓をあけると、目の前には山の傾斜が広がっている。その山へ続く道が近くにあると知ったのは最近だった。散策していると、都留アルプスハイキングコースの案内看板が立っていた。せっかく見つけたのだから、案内に沿って行ってみよう。ふと目に入ったのは、鍛冶屋坂という場所だった。

ひらけた場所へ

鍛冶屋坂は名のとおり、かつて鍛冶屋が並んでいたところだ。西願寺のそばにあるが、鍛冶屋坂の入り口はどこからなのか。鍛冶屋坂トンネルつづく歩道から分かれているコンクリートの道をのぼる。軽トラック一台がぎりぎり通れるくらいの狭さで、その急な坂道に少し息切れしてしまった。運動不足ではなく、マスクをしているせいだと思いたい。道なりに曲がると、その先は二手に分かれていた。動物が出てきそうな左の道に対して、人が通つていそうな右の石階段をのぼる。すると大室神社が見えてきた。広々とした芝生に建っているさまは、こじんまりした印象を持つ。だが、同時に清らかさがにじみ出るたらずまいだった。

神社の左裏手へまわると、馬頭観音が見えた。視線を少し前にやるとコンクリートの橋がある。これは鍛冶屋坂水道橋だ。地域の人には、橋脚の意をあらわす「ピーヤ」と呼ばれ親しまれている。ピーヤの下で手をたたき、鳴り龍（※）を聞く。道路にふる雨の波紋同士の重なり合つて広がるような響きだった。ピーヤをくぐり抜けると、都留アルプスの山道にでる。まばらに木や草が生えているようすはまさに野山だ。いつぼう、ピーヤ越しに見る鍛冶屋坂は木々が立ち並んでいて薄暗く、秘密基地のようだった。山のなかにコンクリートのピーヤがあると、アンバランスな光景かもしれないが、意外と違和感がない。それはピーヤを挟んで異なる風景が見えるからだ。なんだかピーヤが鍛冶屋坂と都留アルプスの山々をはさむ門に見えてきた。

奥へ進むと

先ほど通りすぎた左の道を行ってみる。こちらが鍛冶屋坂のつづきだろう。坂という傾いた平らな道を想像するのだが、ここは土でできた浅めの堀のなかにいる感じがした。まるで道を通すために、もとあつた自然をくり抜いたかのよう。土のなかから木の根が飛びだしているから、ますますそう見えてくる。

この光景がかつて写真で見た、鎌倉時代の「切り通し」(※)を連想させた。見上げると、木々のあいだから黄色に染まりはじめた空が広がり、切り通しよりも開けた道になっている。神秘的でありながら、不気味さも感じられる道を探検家になった気持ちで歩いた。足元を見ると、短い石の柱がいくつかあつた。それらは、むかし整備して道として使っていたことを示している。鍛冶屋坂は進むにつれて見られる表情が違う場所だった。

変わる往来

鍛冶屋坂をくぐると、現道と遊歩道が見える。鍛冶屋坂から遊歩道へ向かう道は徐々に太くなっていき、トンネルがその口を開く。

このトンネルが遊歩道になっているのだ。トンネルを歩く機会はめったにないので、心持ち足取りが軽くなる。歩道の下は色分けがしてあり、道路として使われていたところの面影をのこす。向こう側には都留第一中学校があり、行き来する中学生を見かけた。近所のかたの犬の散歩コースにもなっているらしい。トンネルの遊歩道は、車道から人が通る道へ変貌していた。

* * *

街中で見かける、廃墟やサビた看板なども時間の経過を感じさせる。しかし、もの自体に思いを馳せることはあつても、そこに息づく人びとにまで想像を巡らせはしない。

鍛冶屋坂周辺を散策しているあいだは、まるで地層を観察しているようだった。異なる物質からなる層が重なっている地面と、違う時代に築かれた建物を同時に見渡すことができる。

急なコンクリートの坂、どこか親しみのもてる神社、異界に迷い込んだかのような道。どれも同じ空間、時間にある。けれど、それぞれのまとう雰囲気異なるため、いくつ

かの空間が鍛冶屋坂周辺に内在しているように感じた。

現在の人びとの往来が眼前に広がっているとともに、過去の人びとの往来が頭のなかで重なって見える。コンクリートから砂利、木の根がむき出しになっている土へと、鍛冶屋坂をのぼるだけで時間をさかのぼっている気さえる。ここは過去の風景も現在に映し出している場所なのだ。

林舞子(学校教育学科1年) 文・写真



横から見る鍛冶屋坂。右手にはピーヤがある(2020年12月11日)

都留の風景写真集



@ 都留市上谷 (2020 年 12 月 18 日)

生きものたちはもちろん、今年は人のすがたも
あまり見られない、寒くて静かな冬でした。
それでも自分の心をあたためたくて、人のすがたや鮮やかな
植物を見つけては、しきりにシャッターを切りました。

深沢有佳 (比較文化学科 2 年)・阿部くるみ (地域社会学科 1 年) = 文・写真



上：@本学 4 号館前 (2021 年 1 月 25 日)
中・下：@楽山公園周辺 (2021 年 1 月 18 日)



都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no.107 Mar.

発行人

北垣憲仁

統括編集者

西教生

編集長

宇佐美温加 (1.54.56)

風間悠花 (4-5.6-7.14-16)

深沢有佳 (36.40-45.52-53)

副編集長

渡邊唯 (17-20.24-25.26.47)

編集

赤松優香 (2-3.21-23.24-25)

辻口いづみ (10-13.54-55)

山本義城 (46)

青松笑子 (32-33.46.54)

阿部くるみ (38-39.52-53)

佐藤優美 (4-5.30-31)

高木帆月 (2-3.8-9.27.28-29)

高橋杏佳 (47.48-49)

林舞子 (37.50-51.54)

丸谷美寧 (34-35)

伊藤瑠依 (4-5.46.52-53.54-55)

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELD NOTE (フィールド・ノート) 107 号

発行日: 2021 年 3 月 19 日

発行部数: 800 部

発行・編集:

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

地域交流研究センター

『フィールド・ノート』編集部

E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

編集後記



新たな心の拠りどころ

うたを口ずさむことが増えました。人とまったく会えない日は、話を聞いてもらうかわりに歌に気持ちをぶつけます。それだけで、無言になりがちなコロナ禍のうち時間がひとりを楽しむ時間に早変わりするのです。コロナ禍では、なんとなく憂鬱でも誰かがそばにいて話を聞いてくれるわけではない。このことはひとり暮らしを始めた春から実感していました。家で歌を口ずさむことは私にとってひとりを乗り越えるための術なんだなあと思う今日このごろです。(青松笑子)

しょうがないなあとお元が緩むなか、メッセージアプリを起動させます。今日は父からです。家族が気まぐれに送るスタンプやくだらない写真を見ると、どこか心が軽くなります。春からは文字ではなく電話で反応を返すようになりました。文字だと一語二語で終わるのに、話が脱線して、気がつけば話し続けて1時間。それに平然と付き合ってくれる家族。「ありがとう」。電話を切ると、だいぶ気分転換できたことに気がつきます。携帯越しの家族とのやりとりは、私の心の背もたれです。(林舞子)

どりよくを目に見える1つの作品にする。コロナ禍がきっかけでデジタルイラストを描き始めました。自粛期間の楽しみだったアニメや漫画に触発されたこともあり、もともと好きだったお絵かきに一層のめり込んでいます。多機能な専用ソフトはまだまだ使いこなせませんが、描くたびに新たな技法や便利なツールを取り入れながら、自分でも分かるほどの成長を感じています。うちに込めたものを発散できるお絵かきは私の支えです。(辻口いづみ)

しんどいなあ。そう思ったとき、毎回タイミングよく友人たちから連絡があります。時間を決めて、飲み物を用意してパソコンの前でスタンバイ。画面のなかに友人たちが揃うと、自然と表情も緩んでいきます。画面越しという、手を伸ばしても届かない距離に始めはもどかしさを感じていました。しかし、環境が変わっても私たちは相変わらず。今までのようにたわいもない話を繰り返しています。変化のなかにある変わらないもの。それが今の私を支えるひとつです。(宇佐美温加)

次回予告

あしあと^を たどる (仮)





フィールド・ミュージアム

都留フィールド・ミュージアムとは？

私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川（相模川）流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。